一生懸命

交雑牛農家が地域ぐるみで実践 独自の取り組みで収益向上を

滋賀県の南東部に位置する大中地区（近江八幡市・東近江市）は、近江牛の名産地。ここでは交雑種（F1）の肥育も盛んで、和牛と交雑牛の両方を肥育する生産者も少なくない。同地区の交雑牛生産者が地域の農協とともに実践する取り組みと、交雑牛の魅力をうかがった。

大中地区の交雑牛農家とJAグリーン近江、関係者の皆さん

交雑牛で収益向上を目指す 近江牛産地・大中地区

日本三大和牛の1つ、近江牛のふるさと滋賀県。県内で肥育されている肉用牛の約7割が、近江牛を含む黒毛和種である。次いで多いのが交雑種（F1）。和牛と違い、交雑牛は和牛よりも素牛の導入コストが抑えられる事に加え出荷月齢が25カ月と短く、肥育コスト低減が見込める。その交雑牛で独自の取り組みを実践している地域が滋賀県内にある。訪れたのは、東は鈴鹿山脈、西は琵琶湖に接する大中地区（近江八幡市・東近江市）。県内屈指の農業地帯で、のどかな田園風景のあちこちに牛舎がある。ここには県下の肉牛生産農家の約4割にあたる37戸があり、その内10戸が交雑牛の肥育農家。地区での飼育頭数は1500頭、2018年度の出荷頭数は890頭だ。

大中地区は、かつて「大中の湖（だいなかこ）」と呼ばれる琵琶湖の内湖だった場所。農業用地として干拓され、1967年から入植者が農耕を始めた。畜産は翌68年に和牛約400頭から始まり、69年には和牛とホルスタイン種を合わせて800頭まで拡大。その後、6000頭を超えるまで急増したという。当時、課題になったのが素牛の確保であり、対策を取るべく同地域を管轄するJAグリーン近江が北海道に直営の素牛育成牧場を建設して安定供給体制を整え、更に飼育コストの削減と肉牛の品質の均一化を図るために飼料工場の運営を開始した。そうして大中地区は一大畜産地帯に成長したのだ。

では交雑牛はどのような経緯だったのか。きっかけは91年に始まった輸入牛肉の自由化だった。輸入牛肉との差別化を図るために、和牛×ホルスタインの交雑種を全国に先駆けて90年から導入したという。

「最初のうちはF1と和牛、ホルスタインの3種を飼っていた農家がほとんどで、みんなF1は初めてだからぶっつけ本番。餌も肥育も何もかも手探りでした」と導入時の苦労を話すのはベテラン生産者の下澤明さん。5年前から交雑牛肥育を専門とする農場を経営しており、大中地区で最も多い400頭を飼養。同地区の交雑牛農家をまとめるリーダーだ。

JAグリーン近江 肉牛部会

F1委員会（10農場）

農場名：(株)下澤牧場／他9戸
エリア：滋賀県近江八幡市・東近江市／大中地区
飼養頭数（10農場合計）：交雑牛1,500頭

地域JAと交雑牛肥育農家が挑む 独自のマニュアルづくり

JAグリーン近江肉牛部会には「F1委員会」が組織され、大中地区10戸の生産者が参加。ノウハウの交換や、問題点・対応策を蓄積してより良いマニュアルづくりに挑んでいる。

「家業の農場の仕事に就いてからまだ5年。分からない事があれば先輩たちから教えてもらえるし、牛舎の距離も近いからみんな仲が良い。家族みたいな感じです」と若手農家の村林元気さん。委員会には若手からベテランまでが揃うため、地域の次世代育成にも役立っている。

このF1委員会が大前提の目標として掲げるのは「収益向上」だ。販売先は地元量販店の平和堂や生協で、JAグリーン近江では契約生産という形で販売単価を維持しつつ、更に原価積み上げ方式を採用して、枝肉重量を増やす事で生産者の手取りを少しでも増やす形をとっている。となれば、目指すところは「もっと大きい牛を作ろう」。そのために何ができるか、何をするべきか。

まずは素牛である。JAグリーン近江の直営牧場（北海道）で育てられた6～7カ月齢の去勢牛が、素牛として生産者に供給される。出荷時期や頭数はJAグリーン近江にてコストとともに計画管理していて、生産者の声を直営牧場にフィードバック。素牛育成の改良にも反映している。

「肥育農家と地域が一丸となり交雑牛にかける」

大中地区のF1委員会メンバー。左から村林元気さん、茶野朋和さん、委員長の下澤明さん、肉牛部会会長の鈴木睦雄さん、谷昌幸さん

餌も重要だ。同地区の農場では、JA西日本くみあい飼料株式会社の配合飼料をベースにJAグリーン近江の飼料工場で大中地区専用に特別配合したオリジナル。こだわりの餌を一軒ずつ用意するよりも数軒分をまとめる事でコストが抑えられ、しかも均質的な肉質を目指す交雑牛肥育においては、餌を一括してコントロールする事も強みになる。

餌についてはこれまでも頻繁に議論を重ねてきた。消化効率が良くて飼料効率の良い餌がほしいという生産者の声から、2年前に配合を変更。肥育後期の飼料にカシューナッツ由来の天然成分であるルミナップ®を添加した。抗生物質は不使用だが、経過は良好で順調に増体傾向にある。

枝肉重量は毎年増量 成績アップの秘訣は

「平和堂（総合スーパー）の交雑牛プライベートブランド〝あじわい牛〟のうち、数店舗は大中産限定のものが販売されています。年に何度かの販促イベントでは私たち農家も店頭に立っていますが、評判いいですよ」と

牛に合わせて飼料の見直しを頻繁に行う

は親から牛舎を継ぐ谷 昌幸さん。自農場では和牛と交雑牛を同割合で肥育して、「今は和牛の子牛の値段が高くて導入も大変。契約生産のF1は安定感があってその点では魅力」とも。市場に左右される和牛と安定性の交雑牛。リスク分散という感覚で、和牛肥育に交雑牛をプラスしていく事で経営を安定させるというのも考え方の1つだろう。

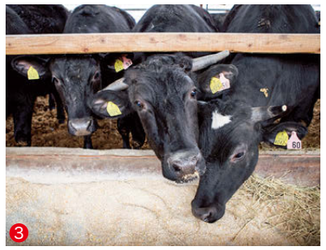
また、「うちは和牛は少しだけ。年末に6頭ぐらい出荷しています」とは農家経営3代目の茶野朋和さん。「和牛はやはり最終的には個体管理を重要視しますが、F1は牛群で見ます。牛群としてバランス良く育てる難しさはありますね」。

一方、肉質は「4等級まで狙わない。安定的に3等級の美味しさを出す事だ」と委員会の意見は一致。ホテルや専門店で供する和牛と違い、交雑牛は手軽に買えるテーブルミートという考え方だ。だが、美味しさに関しては生産者のプライドがある。ブランド牛産地で育てられた交雑牛は、全国的にも販売価格は高い。それに歴史ある近江牛を生産してるという生産者意識や誇りが交雑牛肥育にも活かされている。つまり「美味しいのは当たり前」なのである。

枝肉重量の全国平均が520kgに対して、大中地区は550kg。19年度は、前年度比で枝肉重量が13kg増加。5年前と比べると50kg増加し、毎年成績を伸ばしている。枝重増加は手取りアップにつながるため、真剣勝負だ。やれる事は全てやろうと、F1委員会で国内の優良農場を視察し、気づきを共有している。前向きな気構えと尽きない努力こそが成績アップの秘訣だろう。

F1委員会の中には、一貫経営にこだわる生産者も。「滋賀県生まれ・滋賀県育ちのF1を作っています。体が小さいうちは手間もかかるため、女性の存在も欠かせません」とは肉牛部会会長の鈴木睦雄さん。

生産者と地域JA、そしてくみあい飼料が地域ぐるみで問題や課題を共有し、一丸となって立ち向かう大中地区の交雑牛肥育。生産と技術支援を分担して、それぞれの役割を全うする事が収益向上につながっている。



①地域一体となり、素牛はJAが導入。②地元最大の大手量販店のプライベートブランドである事を看板でPR ③交雑牛は和牛よりも肥育期間が短く、出荷は平均25カ月齢 ④牛群肥育は観察による早めの気づきと処置が大切 ⑤1971年に建設された牛舎団地が今も健在

「生産者の方々と地域農協が互いに協力し、意見交換しながらベストな方法を追求していく。F1委員会をそういう場にしていきたい」と語るJAグリーン近江 畜産課の澤 知宏氏